

私の一冊

カルロス・カスタネダ「ドン・ファン三部作」

The Teachings of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge.

Berkeley, California: The University of California Press. 1968.

A Separate Reality: Further Conversations with Don Juan.

New York, New York: Simon and Shuster. 1971.

Journey to Ixtlan: The Lessons of Don Juan.

New York, New York: Simon and Shuster. 1972.

立教大学名誉教授 実松 克義

若い頃多くの本を読んだ。初めは文学である。高校の頃親しかった早熟な友人の影響で、ロシア文学、フランス文学を読むようになった。その後ドイツ文学、アメリカ文学、イギリス文学にも興味を持った。また当時の流行であったマルクス主義思想、政治思想の本を読んだ。やがて二十代に入ると今度は歴史、哲学、心理学、超常現象等の本を手当たり次第に読んだ。そして気が付くと最後には宗教が大きな関心事になっていた。仏教、密教、修験道からニューエイジに至るまであらゆる本を読んだ。二十代半ば頃のことである。特に印象に残っている本を思いつくままに挙げてみると、ドストエフスキー『死の家の記録』、ルソー『孤独な散歩者の夢想』、ヘンリー・ミラー『南回帰線』、カミュ『ペスト』、サルトル『存在と無』、セリーヌ『世の果てへの旅』、吉本隆明『共同幻想論』、エッカーマン『ゲーテとの対話』、上野霄里『単細胞的思考』、ジョン・G・フラー『偉大な魂の裁判』、グルジェフ『真実世界からの眺望』、シュルツ及びルーテ『自律訓練法』、『チベットの死者の書』などがある。

これらの本は筆者の想像力を刺激し、感銘を与えた。しかし人生を変えるほどの影響を与えた本に出会ったのは一度しかない。それがカルロス・カスタネダのドン・ファン三部作 (The Don Juan Trilogy) : *The Teachings of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge*, 1968 (『ドン・ファンの教え : ヤキ族の知識の方法』)、*A Separate Reality: Further Conversations with Don Juan*, 1971 (『分離された現実 : さらなるドン・ファンとの会話』) 及び *Journey to Ixtlan: The Lessons of Don Juan*, 1972 (『イクストランへの旅 : ドン・ファンの教訓』) である。¹ 三部作

なので厳密には一冊の本ではない。しかし分けることができないので、そこは容認していただくことにする。

これらの本は当時のアメリカの若者を熱狂させた。カスタネダは1970年頃ピークを迎えたアメリカのカウンター・カルチャーの旗手の一人となった。そのフィーバーぶりは1973年3月5日にタイム誌がカスタネダのドン・ファンについての特集記事²を掲載したことでわかる。ドン・ファンは社会現象となったのである。筆者は当時親しかったあるアメリカ人の友人からこれらの本を紹介された。そしてすぐに病み付きになり、繰り返し読んだため、最後には多くの部分を誦んじるまでになった。結局筆者はこの三部作と出会ったため、アメリカに留学して人類学を学ぶことになる。

何がそれほどまでにアメリカの若者を熱狂させたのか。また何故筆者の人生を変えてしまうほどの影響を与えたのか。

初めに、まず作者カスタネダとこれらの本が出版されるに至った経緯を述べてみよう。

カルロス・カスタネダは、本人の言うところでは、1935年にブラジル、サンパウロの由緒ある家庭に生まれた。しかしアメリカ合衆国移民帰化局の記録では、1925年にペルー、カハマルカに生まれている。また由緒ある家系でもなかったようだ。この違いはカスタネダの虚言癖から来るものである。昔の友人の証言によれば、彼は「機知に富み、想像力豊かであるが、大嘘つき」であったという。カスタネダは美術学校で絵画と彫刻を学び、芸術家を目指す、あまりうまく行かなかったようだ。カスタネダは1951年にアメリカ合衆国に移住し、1957年に市民権を取得している。その後1960年に UCLA の大学院に入り、人類学を専攻する。これが彼の人生を変えることになった。1961年の夏、カスタネダはアメリカ・インディアンの薬用植物に関する修士論文の資料集めにアリゾナでフィールドワークをしていた。そしてあるヤキ族の老インディアンに出会う。それが通称ドン・ファン、またはドン・ファン・マトゥスと呼ばれる人物である。ドン・ファンはカスタネダにとって最初はただのインフォーマントにすぎなかった。カスタネダが知りたかったのはあくまでインディアンの薬用植物の知識であった。だが付き合いが深まるにつれ、この老インディアンが只者ではないことに気付く。そして最後には弟子入りをして、ドン・ファンの指導でシャーマンの修行をすることになるのである。この修行は辛いものであった。結局カスタネダは途中で修行を放棄することになる。

カスタネダはやがて自分の体験を本にまとめて出版することを考える。処女作『ドン・ファンの教え：ヤキ族の知識の方法』は1968年に出版された。発売と同時にベストセラー

になり、カスタネダは一夜にして有名人となった。その後カスタネダは1971年に第二作『分離された現実：さらなるドン・ファンとの会話』を、また1972年に第三作『イクストラへの旅：ドン・ファンの教訓』を出版する。続編は読者の期待を裏切らなかった。この三部作によってカスタネダはアメリカの流行作家になった。処女作は基本的には人類学のドキュメントであった。だが第二作、第三作は人類学を超えた一種の思想小説とも呼ぶべき内容になっている。

ドン・ファン三部作には何が書かれているのか。

処女作『ドン・ファンの教え』は二部構成になっていて、第一部がフィールドノート、第二部が構造分析である。第一部のフィールドノートでは、カスタネダがドン・ファンと出会うに至った経緯、そして実際に弟子入りして、シャーマンとしての修行をする過程が生き生きと描かれている。第二部の構造分析は第一部のフィールドノートの主要概念を抽出し、論文の体裁を借りて解説したものである。

第一部の大半はカスタネダの幻覚体験で埋め尽くされている。ドン・ファンはカスタネダに三種類の幻覚植物を処方し、体験させる。ペヨーテ、ダトゥーラ、そして聖なるキノコである。これらの植物が引き起こす幻覚体験が詳細に、ほとんど食傷するほど記述されている。ドン・ファンの意図はカスタネダの理性を和らげること、つまり既存の世界観からの解放にあった。シャーマンになることは新しい世界観を学ぶことであるが、そのためには古い世界観を忘れなければならない。だがドン・ファンはカスタネダが生来の言葉の人間であり、理性を捨てることができないのを知る。そのため可能な限り言葉を排除して、体で理解させることにしたのである。

だがこの処女作を特別なものにしてしているのは幻覚植物体験の描写ではない。ドン・ファン・マトゥスという稀有なアメリカ・インディアン・シャーマンの生き方、世界観である。ドン・ファンの言葉には人間についての驚くべき洞察と叡智が含まれている。中でも特筆すべきは「知者の四つの敵 (The four enemies of a man of knowledge)」の一節であろう。ドン・ファンはヤキ・インディアンのシャーマンを *man of knowledge* と呼ぶ。知識を持つ人という意味である。何の知識か。もちろんシャーマニズム、呪術の知識である。刊行された日本語訳では「知者」となっているので、そのまま使用することにする。この呼称はシャーマンの語源³とまったく同じ意味である。

知者 (シャーマン) になろうとする者は多くの事を学ばなければならないが、その過程で四つの敵と遭遇する。「恐れ (fear)」、「明瞭さ (clarity)」、「力 (power)」、そして「老年

(old age)」である。人が学び始める時、初めに「恐れ」が大きな敵として現われる。だが恐れてもけっして逃げてはならない。逃げずに向かってゆくと、やがて「恐れ」が去る時が来るのだ。恐れを消す「明瞭さ」を手に入れたからである。だが「明瞭さ」はまた気付かないうちに第二の敵となる。慣れすぎると進歩がなくなるからだ。そのためには既知の物事に対してあたかも未知であるかのように接しなければならない。この困難な課題に打ち克った時、真の意味での「力」が現われる。「力」の獲得は知者にとって不可欠な階梯であり、いわゆる呪術と呼ばれるものはこの力によって行われる。だがこの「力」はまた恐るべき敵にもなる。何故ならそれは往々にして暴走し、多くの者がここで躓いてしまう。だがこの「力」を統御できた者だけが「知者」の道を歩むことが出来る。そしていかなる知者も最後には「老年」という残酷な敵に遭遇する。「知者」であり続けるためにはこの敵をも退けねばならない。

知者（シャーマン）への道のりは険しくまた遠い。知者を目指す多くの人々が途中で挫折し、脱落し、あるいは間違った道を進み、またあるものは死ぬ。それほど危険な道である。ドン・ファンはここでもまた珠玉の言葉を語る。「心ある道」である。「心ある道」は英語では *path with heart*、スペイン語では *camino con corazón* となっている。いかなる困難に直面しようとも本心から望んだ修行の道という意味であろう。知者を目指す者は修行が「心ある道」であるか否かを見極めなければならない。興味深いのはドン・ファンがこの言葉を自戒とともに語っていることである。若い頃血気盛んであったドン・ファンはまだ「心ある道」を知らなかった。そのため挫折と失敗を重ねた。

この道には心があるか？ もしあればそれはよい道だ。なければ役に立たない。どちらの道もどこかに通じてるわけではない。だが一つには心があり、もう一つにはない。一つは旅を楽しいものにし、その道を行く限り、おまえは道と一体だ。もう一つはおまえの人生を呪われたものにする。⁴

この本に序文を書いたウォルター・ゴールドシュミット⁵は、その中で「本書は民族誌であるとともに寓話である」と言っている。その理由はこの本の内容が北アメリカ先住民族の一部族の民族誌を超えたメッセージを持っているからにほかならない。「知者の四つの敵」は見習いシャーマンのために用意された訓戒である。しかし同時にまたそこに含まれる知恵は我々すべての人生においても役立つものである。「四つの敵」はその意味で普遍的

な真理を表している。また、「心ある道」は苦行とも言える知者の修行における解毒剤のような効果を持つ。それはシャーマニズムという特殊な世界を超えて、我々の心の奥深く響く。まさしく人間として生きるとは学びの連続なのである。

処女作の出版の後、カスタネダはドン・ファンを再訪するが、それを契機にカスタネダのシャーマンとしての修行が再開される。第二作『分離された現実』はこの二度目のシャーマニズムの体験を描いたものである。この体験を通して、カスタネダは初めてドン・ファンのシャーマニズムの知識、賢者の言葉の真の意味を理解する。それはもはや人類学という窮屈な範疇を超えたものであった。

第二作の主題は「見ること」とは何かということである。第一部が「見ること」の予備的練習、第二部がその本番である。知者（シャーマン）修行の最終目的は「見る」ことにある。意外といえば意外である。シャーマンは呪術師とか呪医とも言われるが、一般的な理解では、呪術を実践するのが仕事であると思われる。しかしドン・ファンによれば呪術は修行の一階梯にすぎない。呪術とは世界を解体し、再編成することによって生まれる力を行使することである。病気を治すことも、人を殺すことも、また奇跡を起こすことすらできる。しかしそんなものは子供だましにすぎない。知者の真の目的は「見る」ことにあるのだ。「見る」とは何か。これに関して英語には二つの語彙がある。look と see である。ドン・ファンによれば前者は「物事の表面を見る」こと、後者は「物事の本質を見る」ことである。「見る」とはこの see にあたる。

何故「見ること」は重要なのか。「見ること」ができるシャーマンは目に見えない世界を支配する恐るべきスピリットと徒労とも言える格闘をする必要がないからである。「見ること」はシャーマンを不毛な呪術の牢獄から解放し、より高い次元で生きることを可能にする。これは、日本的な概念に翻訳すれば、一種の「悟りの境地」とでも呼べるものであろう。

では「見ること」すなわち seeing はいかにして可能なのか。物事を何の先入観もなく、あるがままに、見ることができた時である。どこかで聞いた話ではないだろうか。そう思っ振り返ってみると、仏教の禅で言う「見性⁶」によく似ているではないか。禅においては、これは心を「空」にすることで実現する。大乘仏教の考えによれば、世界の本質は「空 (śūnyatā)」である。その本質と一体化する修行がすなわち座禅であり、それを取り巻く修行生活のすべてである。では「見ること」の場合はどうか。ドン・ファンによればそれは二つの世界の狭間において起きる。すなわち日常（現実）の世界と呪術（非現実）の世界

の狭間である。前者は一つの世界の見方であり、後者はもう一つの世界の見方である。すべてのシャーマンは生業として呪術を学び実践する。だがそれは最終目標ではなく、より深い世界の真理を学ぶためのステップにすぎない。何故ならどちらの世界も真実ではないからである。それに気付いた時人間の世界認識のありかたに変化が起きる。そしてそれは物事の本質の理解へとつながってゆくのである。

第三作『イクストランへの旅』は第二作の主題、「見ること」とは何かをさらに掘り下げ、それが何を意味するのかをより具体的に語ったものである。「見ること」はいかにして可能なのか。その時人間の知覚に、認知の方法に何が起きるのか。我々が生きているこの世界の隠された秘密とは何なのか。この本の第一部のタイトルは「世界を止める」であり、第二部が「イクストランへの旅」である。第一部は予備的な章である。「履歴を消す」、「死はアドバイザーである」、「ハンターになる」、「責任を持つ」、「日常習慣を断ち切る」、「すること (doing) としないこと (not-doing)」、「価値ある敵」等、シャーマンとしての心がけが劇的なエピソードとともに明示されている。これらはもともと見習いシャーマンのものであるが、同時にまた一般社会に生きる我々にも意味あるメッセージとなっている。

これらの準備を経て、いよいよ第二部でカスタネダはついに「見ること」の体験をする。また「世界を止める」。初めて知者（シャーマン）が見ている世界を知るのである。それは光り輝くコヨーテが語りかける、驚くべき世界であった。この時カスタネダを助けたのが、ドン・ファンと友人、マサテコ族の知者、ドン・ヘナロである。そして最後にドン・ヘナロがイクストランへの旅を語る。

知者になるためには「力」の獲得が不可欠であるが、それは「朋友 (ally)」と格闘し合体することによって成就される。「朋友」とは何か。この謎のような存在は三部作を通して現われるが、その説明はあまり明快ではない。だが筆者は、「朋友」とは一神秘的で理解を超えたところはあるが一基本的には人間、動物、植物等の形をして存在している特別なスピリット、エネルギーであると考え。 (すなわち「朋友」とはシャーマンの守護霊、パワー・スピリットであり、世界中のシャーマニズムに見られるものである)。すべての見習いシャーマンは選ばれた「朋友」と格闘し、試練に打ち勝たなければならない。ドン・ヘナロもまたかつて自分の「朋友」と格闘した。その結果何が起きたのか。既知の世界観が解体したのである。ドン・ヘナロは「朋友」と組み合ったまま空中を回転し、やがて地上に降り立ったが、そこは見たこともない土地であった。彼は自分の故郷の町、イクストランに帰ろうとする。だが決してイクストランにたどり着くことはなかった。町は自分が知っ

ている場所にはなかったのである。またその途中で出会った人々は普通の人間ではあったが、ドン・ヘナロにとってもはや現実の人間ではなかった。

知者（シャーマン）になるために、あまりにも多くのことを知り、あまりにも遠くに旅したドン・ヘナロはいわば人間の究極の孤独とも言うべき体験をした。ドン・ヘナロの感情は、スペインの詩人、ファン・ラモン・ヒメネス⁷の「絶対的な旅（El Viaje Definitivo）」として表されている。

・・・私を愛した人々は死ぬだろう、
また町は毎年新しくなるだろう。
だが私のスピリットは常に懐かしく彷徨うだろう、
花咲き乱れる私の庭の同じ深い片隅で。⁸

ドン・ファン三部作のこの最後の部分は感動的なエピソードである。ここで語られているのは人間存在の孤独である。知者であることは人間の本質を深く理解し、その知識によって生きるということである。それは叡智の力である。だがその代償もまたある。知りすぎた人間は孤独である。知者もまたその運命から逃れることはできない。

筆者はドン・ファン三部作をアメリカ留学前に読み、大きな感動を覚えた。

その後、留学中にカスタネダの第四作 *Tales of Power, 1974*（『力の物語』）が出版されていることを知った。さっそく読んでみたが、残念ながらこの本は筆者を失望させた。ドキュメントに不可欠なリアリティが欠けていたのである。ここではドン・ファンは近代的な姿をして再登場する。スーツを着てカスタネダの前に現われてトルテカの世界観を語るかと思えば、一緒に環境問題の会議にも行く。そして何と自分で株までやっているのである。それまで持っていたドン・ファンのイメージは瓦解した。この本の中心テーマであるトルテカ哲学の説明もまったく説得力がなかった。すべてが明らかな、また出来の悪いフィクションであった。留学から帰国後、ドン・ファンの続編を折に触れて読み続けたが、その大半は失望しか与えなかった。確かに中には *The Eagle's Gift, 1981*（『鷲の贈り物』）のように感動を呼ぶ著作もある。しかしその内容は新しい展開ではなく、ドン・ファンという稀有な人物、インディアン賢者への追憶から来るものである。この本の最後ではドン・ファンとそのグループの異界への旅立ちが描かれ、ドン・ファンはトルテカの「翼ある蛇（ケツアルコアトル）⁹」として神格化される。やはりドン・ファンはずっと前にどこかで死んだ

のである。

カルロス・カスタネダはそのドン・ファン三部作によってアメリカ文化の寵児となった。だがその栄光も長くは続かず、書かれている内容がよく知られるようになると、多くの人々はその真偽を疑い始めた。R・ゴードン・ワッソン¹⁰はその一人である。ワッソンは中米シヤーマニズムで使用される聖なるキノコの専門家であるが、書評を依頼されてカスタネダの作品を読む。その結果ドン・ファンが使用する聖なるキノコに関して疑問を持つことになった。何故ならシロシベ・メヒカーナ (*psilocybe mexicana*、ベニテングタケの一種)と思われるこのキノコはソノラ州を含むメキシコの北部には自生していないからだ。またドン・ファンの処方では、このキノコは特別な場所で採取して少なくとも一年間乾燥させ、その後他の植物の成分と混合し、それをパイプに詰めて燃やし、その煙を吸う。カスタネダはこのキノコ混合物の煙の影響下に身体を失くすという恐怖の体験をする。ところがワッソンが調査したオアハカ、マサテコ族のシャーマン、マリア・サビーナ¹¹は治療の儀式(ベラーダ)の際聖なるキノコを使うが、そこではキノコは引き裂いたものを丸ごと食べるのである。ワッソンはカスタネダに質問状を送るが、満足な答えは得られなかった。

作中の登場人物についてはどうか。彼らは実在の人物なのか。

さいわいドン・ヘナロのモデルとなったと思われる人物が実在した。メキシコ、ウイチョル族の著名なシャーマン(マラカメ)、ラモン・メディーナ・シルバ¹²である。カスタネダはこのシャーマンと交流があった。おそらくは彼を通してウイチョル族のシャーマニズムを知ったと思われる。ウイチョル族のヴィジョン・クエストはあまりにも有名である。毎年マラカメはペヨーテの茂る聖地、ウィリクタへ長い旅をする。そこでペヨーテを食べ聖なるヴィジョンを見る。カスタネダは自作の中でペヨーテの儀式(ミトーテ)に参加し、ペヨーテのスピリット、メスカリートと出会う。そしてその様子を詳細に記述している。またドン・ヘナロが重要な登場人物として現われる。作中ではヘナロはウイチョル族ではなく、マサテコ族になっているが、そのモデルがラモン・メディーナ・シルバであることは明らかである。ヘナロの滝へのジャンプ、超人的なバランス感覚はラモンが得意としたものである。

ところで最大の関心事はドン・ファン、あるいはそのモデルとなった人物がいたかどうかということである。多くのアメリカの若者、ジャーナリスト、研究者がドン・ファンを探して、ヤキ族の居住地に押しかけた。実は筆者もまた一かなり後になってからではあるが一その一人である。1990年代の半ばに筆者はメキシコ、ソノラ州のヤキ族のある居住

地を訪れた。この居住地はソノラ州南部の中都市シウダード・オブregonの北の小さな町、ビカムにある。この一帯はサボテンの茂る不毛な砂漠地帯で、まさにドン・ファンが住んでいた世界を髣髴とさせる。ここで、町役場で紹介されたカルロスという若者に案内され、ヤキ族のシャーマンに会った。筆者が会ったのは五十代ぐらいの日焼けした中年の女性のシャーマンであった。筆者は単刀直入にカスタネダのドン・ファンを知っているかと聞いてみた。残念ながら彼女は何も（カスタネダの著作さえも）知らなかった。しかし帰り際に、付け加えて、そのようなシャーマンがいてもおかしくはないとも言った。筆者は『イクストラへの旅』に登場する女性のシャーマン、ラ・カタリーナを思い出した。

ドン・ファンは実在したのか。あるいはそのモデルとなったシャーマンは存在したのか。残念ながら現在までそうしたシャーマンが実在したという報告はない。またそれを暗示するような間接的な証拠もない。ドン・ファンはカスタネダの想像力の産物であろう。だがその想像力を生み出したのは、やはりカスタネダ個人のシャーマニズム体験であったと思われる。少なくともドン・ファン三部作に見られるシャーマン、ドン・ファン・マトウスという人物はそうした体験なしには書くことが困難である。具体的なことは詳らかではないが、人類学のフィールドワークにおいて、カスタネダは何らかのシャーマニズムの体験をした。少なくとも複数のシャーマンに会って聞き取り調査をし、また実際にシャーマンの儀式に参加したと思われる。その体験を基に、自分で読みかじった中南米のシャーマニズム、ニューエイジ、オカルト、東洋神秘思想などの知識を織り交ぜ、ドン・ファンを創造したのであろう。

1980年代になるとカルロス・カスタネダはアメリカのアカデミズムから完全に忘れ去られる。しかしその後も作家としては成功し、ニューエイジ、精神世界を中心とする人々に根強い人気を保ち続けた。生涯に12冊の著作を出版するが、これらは17カ国語に訳され、合計で3,000万部近くも売れたという。ロス・アンジェルス近郊の保養地サンタ・モニカにかつてフェニックス・ブックストア（Phoenix Bookstore）というニューエイジの書店があった。カスタネダが時々現われるというので1990年代によく行ったものだが、残念ながら一度も出会うことはなかった。カスタネダは秘密を好む人で、自らのプライバシーには極めて慎重であった。特に写真を撮られることを嫌ったようだ。有名なサム・キーンとのインタビュー記事¹³にも写真はなく、その代わりに半分消えかかっている似顔絵が載っていた。人前に姿を現すこともあまりなかった。しかし晩年にはかなり変化したようで、ドン・ファンから伝授されたというスピリチュアルな身体トレーニング、テンセグリティ¹⁴のワーク

ショップをしばしば開いている。カスタネダは1998年に72歳で亡くなった。

筆者は何故カスタネダのドン・ファン三部作にこれほどまでに惹かれたのか。今回二十年ぶりにカスタネダの著作を部分的に読み返してみたが、あまりよくわからなかった。かつての感動はすでに消えてしまっていた。思うにこの種の本は読む適切な時期があるのではないだろうか。筆者はこの三部作を二十代の前半に読んだ。まだ未来がはっきりしない疾風怒濤の時代、人生で最も苦しい試行錯誤の時代であった。おそらくその時ドン・ファンの言葉は啓示のように響いたのであろう。

また時代性の問題もあると思われる。筆者の青年期は疑いもなく激動の時代であった。当時の最大の歴史的イベントはベトナム戦争である。この泥沼のような戦争はアメリカ社会を根底から揺るがし、多くの人々を不安に陥れた。カウンター・カルチャーは当時のアメリカの「出口なし」的な雰囲気を反映するものである。深刻な事件は日本でもまた日常的に起きていた。大学はバリケードで封鎖され、学生が機動隊と衝突して多くの血が流された。また高度経済成長は人間疎外を引き起こし、国土は公害（環境破壊）によって蝕まれていた。こうした危機的な社会状況の中で多くの若者が何らかの啓示的な書物を求めていたのではないかと思う。

いずれにしても筆者はドン・ファン三部作を通して人類学を知り、またシャーマニズムの世界を知った。後年になって筆者は人類学の研究者となり、中南米を歩き回ってフィールドワークを行う。その結果、最も深い真理は、事実をして語らしめることにあることを知った。にもかかわらずドン・ファン三部作が筆者の人生の軌跡の原点であることに変わりはない。これらの本は世界がまだ若かった頃に出会った青春の書である。それを思い出すことは遠い過去の世界に時間を遡ることである。その余韻を反芻しながら本稿を閉じたいと思う。

注

1. これらの日本語訳は筆者の直訳によるものである。実際に刊行された日本語版は参考文献を参照されたい。
2. Don Juan and the Sorcerer's Apprentice. 1973. *Time* magazine, 5 March 1973 issue.
3. ツングース諸語の šaman（シャマン）は「知恵ある者、賢者」という意味でシャーマン（shaman）の語源となった。
4. Castaneda, Carlos. 1968. *The Teachings of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge*. Berkeley,

California: The University of California Press. Fieldnotes, Monday, January 28, 1963.

5. Walter Rochs Goldschmidt (1913-2010) 20世紀アメリカを代表する人類学者の一人。長年 UCLA で教鞭をとる。
6. 禅の修業において人間の本性、本質を透視すること。
7. Juan Ramón Jiménez (1881-1958) スペインの詩人。1956年ノーベル文学賞。「絶対的な旅」は *Poemas agrestes* (1910-1911) 所収。
8. Castaneda, Carlos. 1972. *Journey to Ixtlan: The Lessons of Don Juan*. New York, New York: Simon and Shuster. Chapter 20.
9. Quetzalcoatl トルテカ、アステカの神。金星の象徴であり、知性、平和、また豊穡の神である。
10. Robert Gordon Wasson (1898-1986) アメリカの民族真菌学者。
11. María Sabina (1894-1985) 世界的に名高いメキシコ、マサテコ族の女性シャーマン、賢者。
12. Ramón Medina Silva (?-1971) メキシコ、ウイチョル族の指導的マラカメ(シャーマン)、芸術家。
13. Keen, Sam C. (ed.). 1976. *Voices and Visions*. New York, New York: Harper & Row. Interview with Carlos Castaneda.
14. Tensegrity アメリカの建築家・思想家 Richard Buckminster Fuller (1895-1983) の用語。Tension (張力) と Integrity (統合) の合成語。カスタネダはそれをトルテカの神秘主義と結び付けた。

参考文献

- Castaneda, Carlos. 1968. *The Teachings of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge*. Berkeley, California: The University of California Press. (真崎義博訳『呪術師と私—ドン・ファンの教え』二見書房)
- Castaneda, Carlos. 1971. *A Separate Reality: Further Conversations with Don Juan*. New York, New York: Simon and Shuster. (真崎義博訳『呪術の体験—分離したリアリティ』二見書房)
- Castaneda, Carlos. 1972. *Journey to Ixtlan: The Lessons of Don Juan*. New York, New York: Simon and Shuster. (真崎義博訳『呪師に成る—イクストラランへの旅』二見書房)
- Castaneda, Carlos. 1974. *Tales of Power*. New York, New York: Simon and Shuster. (真崎義博訳)

『力の話』太田出版)

Castaneda, Carlos. 1981. *The Eagle's Gift*. New York, New York: Simon and Shuster. (真崎義博訳

『呪術と夢見—イーグルの贈り物』二見書房)

De Mile, Richard (ed.). 1980. *The Don Juan Papers: Further Castaneda Controversies*. Santa Barbara, California: Ross-Erikson Publishers.

Don Juan and the Sorcerer's Apprentice. 1973. *Time* magazine, 5 March 1973 issue.

Keen, Sam (ed.). 1976. *Voices and Visions*. New York, New York: Harper & Row.

Noel, Daniel C. (ed.). 1976. *Seeing Castaneda: Reactions to the "Don Juan" Writings of Carlos Castaneda*. New York, New York: Perigee Books.